



中華民國
Good for single
Republic of China
months of date here
months of date here
Date of issue: SEP. 22. 1972
Duration of stay: One month from
date of arrival.
For the Ambassador

No. 48956
(Signed)

Fee: U.S. \$ 170.



シュヴィツからの旅

鈴木明

ふうくに
界を歩いてみた



講談社

鈴木 明（すずき・あきら）

1929年東京生まれ。立教大学卒業。1955年より民間放送局勤務。1973年に『「南京大虐殺」のまぼろし』で第4回大宅ノンフィクション賞受賞。以後、ルポライターとして活躍。

著書／『誰も書かなかった台湾』『リリー・マルレーンを聴いたことがありますか』『その声は戦場に消えた』など。

アウシュヴィツからの旅

1979年6月8日 第1刷発行

著者——鈴木 明

定価——980円

© Akira Suzuki 1979, Printed in Japan



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒112 ☎ 03-945-1111（大代表） 振替東京 8-3930

装幀——市川英夫

印刷所——慶昌堂印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

●——落丁本・乱丁本はおとりかえます

0095-436366-2253（0） （学2）

旅立ち前のモノローグ 7

「旅」は謎ときのゲームである 数字ほどあてにならぬものはない 「客観的事実」とは何か? 「論」より「情報」 風俗こそ政治であり、矛盾こそ真実である 「南京大虐殺」事件へのアプローチ テレビ・ドキュメントの手法で書く 本を書いてみてわかったこと 興味と好奇心で次のテーマに ベルリンで知った「アウシュヴィツの影」 もう一つのタブー「ベルリン大虐殺」

アウシュヴィツ収容所跡で

どう考えてもわからなかった……

39

なぜ、いまアウシュヴィツなのか? ワルシャワで最初に出会ったヤミドル買い ドルを奪われた日本紳士の話 ポーランド人は日本を知っている 自由化を求めるいくつかの波 独得の

「耳情報」をもった民衆 列車の中で会ったふしぎな「日本通」
不法撮影容疑で連行される セントメリー寺院の兵隊人形
アウシュヴィツ収容所跡での衝撃 なぜかもう一度見に行った
「ポーランドにユダヤ人はいません」 「善良」なユダヤ市民と
「非善良」なユダヤ人 ワルシャワ空港をあとにして

『凱旋門』の主人公はいった

「ユダヤ人だって全部が全部ユダヤ人じゃない」

77

ショパンの辿った道をなぞれば…… パリは「三角形」の町
「スターリンググラード」は場末 ペール・ラシューズとの対決
ロスチャイルド家は健在なり フランスの歴史を語る墓碑群
パリに香港の匂いがある フランスにいるユダヤ人 サルトル
の問題提起 東欧のユダヤ人と西欧のユダヤ人 『凱旋門』と
レマルクをめぐる 『ホロコースト』は放映されたが……

「完璧」なドイツ人は

テレビ映画『ホロコースト』をどう迎えたか？

III

ドイツの中のユダヤ人 日本とはあまりにケタ違い！ ドイツに「ドイツ人」はいない?! 「ドイツ人」を因数分解してみると 独仏両国の怨念の地 「ラ・マルセイエーズ」はドイツの歌? 国境の町シュトラスブルク・リストラスブル 現代ドイツは理想的連邦国家 決めたことには従うのがドイツ流儀 色事にも「完璧」を求めるドイツ人 いまなお続く戦犯追及 虐殺の下手人ルドルフ・ヘスの「手記」 「手記」が投げかけている問題点 ナチス幹部のユダヤ観は矛盾だらけ 西ドイツで行なった「アウシュヴィツ裁判」 ドイツはやはりふしぎな国

映画『カサブランカ』のあとを辿りながら

アラブ・イスラエルを考えてみた

153

映画『カサブランカ』の舞台を行く パリに住むアラブ人をとらえた歌手 コーランと社会主義 アラブ式「ものの見方・考え方」 『アルジェの戦い』はマカロニ革命? 因果はめぐる『エンテベの勝利』 日本のトビ職氏アルジェリアをゆく 突如出現した千夜一夜の世界 「キッシンジャーに似ているな」 国境の町ウジタにて モロッコの砂漠を西へ…… 西欧寄りで

反イスラエルの王国 映画『カサブランカ』封切日の謎 カサ
ブランカのユダヤ人たち イスラエル建国とカサブランカ 北
アフリカの果てまで来て

あのイタリア人たちが、ある日突如

「イタリアは強い」といいはじめた……

201

地中海はヨーロッパである ローマは永遠に品物の戻ってこない
都である 「イタリアには五千五百万の共和国がある」 イタ
リア人は非愛国者か？ サッカーは血を流さない戦争である
「イギリス」ってどこの国？ ロンドンに黒人選手が現われたと
き 北の奴等のチームなので…… カルチョは神話になった
戦いすんで残ったものは？ 十億円のトレード・マネー カ
ミロ・オリベッティの「ユダヤの商法」 アメリカの「栄光」は
イタリアから

『刑事コロンボ』と『ルーツ』と『ホロコースト』は
アメリカ西海岸でドッキングした

237

コロンボ刑事は南イタリア出身？ 「ユダヤ人」といつてもいい
ろいろあって ロサンゼルス市を一廻りすると コロンボ刑事
はなぜロス警察にいたのか？ 『ルーツ』を作った白人は？
ガンビア兵は日本軍と戦った 「鼻が大きな男」の逮捕 アウ
シュヴィツとポランスキーの関係 ポランスキー事件の謎の謎
映画『バニシング・ポイント』は教えてくれた

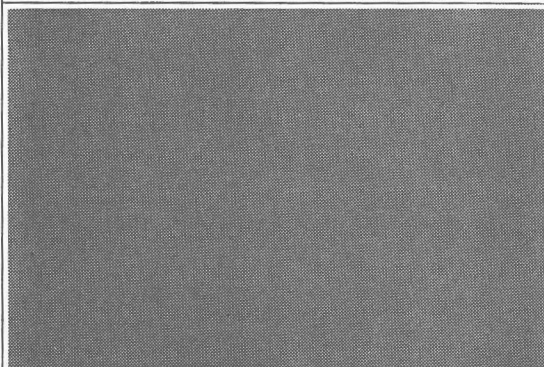
旅の終りに結論めいたこと

269

あとがき

275

旅立ち前のモノローグ



□「旅」は謎ときのゲームである

「アウシュヴィツからの旅」と、まさに大上段から真向に斬り下ろすみたいないへんな題で、これからその「旅」の話をしてみたいと思うのですが、ここで「アウシュヴィツ」という名前を出したのは、それほど深刻な意味があるわけではありません。

だいたい僕は、「旅」はいつも「謎ときのゲーム」であると思っています。無論、旅の面白さは多種多様でしょうが、僕は本来あまり食物にこだわらず、身につけるものにも、景色の美しさにもあまり興味がなくて、なりふりかまわず、なぜか、パズルにのみ挑戦してゆくという性格らしいのです。以前、あまり旅をしなかった頃には、そんなことには気がつかなかったのですが、これはいわば「旅」によって発見した自分の奇癖なのかもしれません。

そういう意味からいけば、「アウシュヴィツ」こそは、今まで僕に投げかけたたくさんの謎の中でも、あるいは最大のものかもしれません。その意味で、この場所を原点として、いわば世界を半周ほどしたお話をしてみたいと思うのですが、これは「アウシュヴィツの研究」でもなければ、「アウシュヴィツの旅」でもありません。別に、言葉にこだわるわけはありませんが、そのまま文字どおりに「からの旅」というふうを受けとっていただきますと、話が進められませ

ん。

もっとも「からの旅」とはいうものの、僕は日本人であり、東京・赤坂の小さなマンションに住んでいる男ですから、この人物が、どんなプロセスを経て、この「アウシュヴィツ」なる場所にたどりついたか、というお話をしませんが、「からの旅」にはなりません。しかも僕の場合は、他の報道機関などにいる方たちのように、会社から「アウシュヴィツ」取材してこい」というふうに命ぜられたというような形ではありませんので、それまでのいきさつを、多少長くなりますが、いささかの主観と体験を交えてお話させていただきたいと思うのです。

□数字ほどあてにならぬものはない

僕自身、人生での一番長い時間を、民間放送局という株式会社 of 機構の中で過ごしてきました。民放というのはまことに興味深い会社で、それ自体でことによると何冊もの本が書けるかもしれないが、それはこの本のテーマではありません。ただ僕が申し上げたいのは、民放というところは、「マスコミ」とはいっても、新聞社ともNHKとも違う、独特の味わいのあるところである、ということだけです。

僕のお世話になった会社は、民放の中でもたいへんリベラルで、基礎もがっちりしているとい

われていますが、いわゆる「マスコミ」として果たす役割ということだけをとりあげていえば、残念ながらNHKには遠く及ばず、新聞社とも基本的に性格が違いますし、僕の知っている限り、アメリカの三大ネットワークがアメリカ国民に与えている影響に比べても、やはりヒトケタ違うといわざるを得ません。

僕はこの会社で主として編成局というところを十五年以上もウロウロしていましたが、ある機会から調査部へ移ることになりました。「調査部」という名前は、世間一般にはあまり重要な部署とはみなされていないようで、例えば田英夫さんなどは、かつて僕の会社の調査部に転属されたときに、たしか「左遷」というようなことをいわれたように憶えています。これはたいへんな誤解か、あるいは失言ではなかったかと思っております。少なくとも僕自身、この調査部でどれほど多くのことを教えられたかは、申し上げるのも恥かしいほどのものでした。

特に、僕が一番興味を持ちましたのは、「数字」ということです。数字というのは、いわば文字に書くことのできる一番確実なもので、「百」といえばそれはまさに百であるし、客観的事実そのものであります。百票対百一票なら、百一票の人は、たとえ一票差でも間違いない勝ちであって、これを信用しなければ、世の中の何もスタートしません。

しかし、実は数字ほど不確実なものはない、ということを僕に教えてくれたのは「調査部」であります。例えば、一番簡単な例が、皆さんよくご存じの「視聴率」という数字です。新聞や雑

誌などでも（ビデオ・リサーチ調べ）とか（ニールセン調べ）とかカッコつきで、番組の視聴率は示されます。局はこの一パーセントに一喜一憂しながら、「勝った、敗けた」といつているのは、ご存じのとおりです。

多少放送界に関係のある人なら知っていることですが、この数字には誤差があります。何しろ、一千万世帯をカバーするエリアで、サンプル数、つまり実際に視聴しているかいないかを目標にされている家は、三百世帯なのです。何だ、たったの三百か、とびっくりなさるのは、これまた素人考えです。たとえ対象が倍の二千万世帯であったとしても、三百というサンプル数は「ある数字」を出すためには、満足とはいえないけれども、充分な数字なのです。これには簡単な式があって、

$$E = \pm 2\sqrt{\frac{P(100-P)}{n}}$$

という数式は、誰が考え出したのかは知りませんが、ずっと昔からよく知られているのです。Eはエラー、つまり誤差で、nがサンプル数、Pは視聴率ですから、サンプル数が多ければ、たしかに誤差は少なくなります。しかし、いまの十倍のお金をかけて調査したとしても、二パーセントの番組が一九パーセントの番組より、間違いなくより多く見られているという保証は、まったくありません。

大切なことは、数字そのものよりも、その数字のもつ意味を考える、ということです。だから局の人は、どんな階層の、どんな男女が見ているか、ということ細かく分析します。僕も、そのぐらゐは編成にいた頃からやっていました。しかし、その数字のもつ運命的な予見というか、哲学的意味あいというか、そんなことまで考えたことはありませんでした。これは、いわば数字と常にニラメッコをしていて、突如浮かんでくるUFO的ヒラメキとでもいうものなのです。うまくいえませんが、いろいろな数字をタテ、ヨコに並べ、それをコンピューターにかけ直し、そこから出てくる新しい数字をさらにいじくってゆくうちに、何かにつき当たる、その「何か」なのです。そのできる人が、いわば「プロ」ということで、『不確実性の時代』を書いたガルブレイスさんなどは、いわばこの数字の読み方のプロフェッショナルということでしょう。

去年はたまたま「不確実性」ということが流行り言葉になりましたが、数字こそは、この「不確実」そのものの存在なのです。極端な例を考えれば、仮に「元号存続問題」で国民投票をやったとしましょう。それで五一対四九で「存続」派が勝った、とします。実際にはこれで勝負はあったわけですが、もし仮に、この投票の結果を見て、一週間後に同じ投票をやったとしましょう。おそらく、これと同一の数字が出ることはないと思います。この結果を見て、棄権した人も投票に加わるかもしれないし、結果によって考えを変える人もいるでしょう。つまり、結果はいつとも、ただちに次の原因を生んでいるわけです。僕が「数字」のことをくどくどしく申し上げた

のは、つまり数字そのものには、何の「確実性」もない、ということなのです。

□「客観的事実」とは何か？

このことは僕に「客観的事実」とは何か？ という重大な疑問を与えることになりました。普通、ニュースは「客観的事実」ということになっています。例えば六時半からやっている民放のテレビ・ニュースや七時のNHKのニュースは、特に「ストレート・ニュース」と称して、主観を交えないことを原則としています。NHKのアウンサーも他の「ニュース・キャスター」といわれている人も、渡された原稿を読むという点では、同じくトーキング・マシンです。

たしかに、テレビのニュースは「客観的事実」を示します。新聞で「ぬかるみを」と書くところを、テレビは一秒の写真で、より具体的に、どの程度の「ぬかるみ」であったかを伝えます。

しかし、これとて実は、「カメラ」という魔術師が捉えた幻影であることは、いうまでもありません。カメラの眼というのは実はまったく主観的なもので、いい例が、僕は『ローマの休日』という映画を見て、あのスペイン広場というものを、ローマっ子と同じように知っているつもりでしたが、実際に行ってみて、まるで「小さい」のにびっくりした経験があります。テレビ・ドラマで写っている「家」は、いつも実際の家の何分の一かに作られています。何分の一でない

「真実」として写らないのです。

テレビ・カメラは「客観的」ではあっても「真実」ではありません。第一、ニュース・カメラマンたちは、多くの場合「現場」に居合わせてはいません。例えば「何丁目何番地で殺人がありました」といっても、それは無論、警視庁から知らされて現場に駆けつけたので、それは記者が「聞いて、想像した」に過ぎません。われわれの情報というのは、ほとんどの場合、そういう「第二次」「第三次」の情報をもとに、ある一つの結論を下しているわけです。

□「論」より「情報」

いまから八年ほど前、つまり僕が調査部にはじめて足をふみ入れた頃、いまのように「ノンフィクション」とか「ルポルタージュ」とかいう言葉は、それほど一般化されていませんでした。調査部では『調査情報』という、なかなかしゃれた月刊誌を発行していましたが、そのほとんどのものは「論」でした。つまり、第二次、あるいは第三次の情報を根拠に、ある一つの「結論」を出す作業、といってもいいでしょう。この「論」と「論」がかみ合うのが「討論」で、これは知的なゲームをお客さんに見せる、というものです。しかし、その根拠となる証拠は、実は第二次、第三次の情報で、二人とも「ぬかるみ」を実際に歩いて見たわけではありません。最後